

## はじめに

河上 暁弘

広島平和研究所は、これまでも研究や教育を行う一方で、研究成果を広く市民の皆様に戻元する取り組みを進めており、その一環として、核兵器廃絶など平和にかかわる諸問題をテーマに、連続市民講座や国際シンポジウム、研究フォーラム等を継続的に開催しております。また、二〇一四年度より、広島平和研究所が主催者としてかわったシンポジウム等の内容をお伝えし、現代世界における平和構築に関する問題提起とするため、この小冊子シリーズの「広島平和研究所ブックレット」を刊行しております。

第八号である本書は、「広島から戦争と平和を考える」をテーマにしたものです。元と

なったのは、広島平和研究所主催の二〇二一年度の国際シンポジウム「流動化する東アジア」(二〇二一年二月四日)、連続市民講座「広島発の平和学」(二〇二三年一月七日から二月一日まで配信)、研究フォーラム「ウクライナ侵攻——ロシア、人道危機、国際法」(二〇二三年三月二十九日)での講演・報告です(いずれもオンラインで開催)。本書は、それらの講演記録等をもとにして報告者・講演者にあらかじめ執筆して頂いた原稿——本を収録しています。

本書の第Ⅰ部は、「流動化する東アジア」をテーマに、「バイデン政権の東アジア太平洋政策」(第一章 佐々木卓也)、「中国習近平政権の自信と不安」(第二章 高原明生)、「東アジアの『新冷戦』と朝鮮半島の『脱冷戦』」(第三章 李鍾元)について検討を加え、現在の東アジア情勢を分析し、同地域において平和を創造する際の課題を探る内容となっております。

第Ⅱ部は、ウラジーミル・プーチン政権下のロシアによるウクライナ侵攻(二〇二二年二月二四日開始)について考察するもので、「ロシアのウクライナ侵攻——人道と規範、二重の危機」(第四章 梅原季哉)、「ウクライナ戦争——ロシア外交の観点から」(第五章 加藤美保子)、「国際法から見たロシアによるウクライナ侵攻——市民向けの国際法入門」(第六章 佐藤哲夫)という三つの視点から考察を加えています。

第Ⅲ部は、「広島発の平和学」をテーマに、「原爆と新聞報道」(第七章 四條知恵)、「憲法

九条と核兵器」(第八章 河上暁弘)、「広島と平和——『当たり前』を見直そう」(第九章 水本和実)、「ミャンマーにおける二〇二一年二月軍事クーデター——国内政治および外交政策への影響」(第一〇章 ナラヤナン・ガネサン)、「グローバル・ヒバクシャの歴史」(第十一章 ロバート・ジェイコブズ)について検討しています。広島平和研究所は、二〇二二年に、当時の全教員が執筆した書籍『広島発の平和学——戦争と平和を考える一三講』(法律文化社)を公開しておりますが、同書の「広島発の平和学」という問題意識を受け継ぎ、さらに深めようとするものです。

いずれも、各執筆者が、学界の各分野の専門的視点から、それぞれの問題を考え、問題提起を行ったものであり、読者の皆様が、市民として、研究者として、学生・生徒として、またグループ等において、この小冊子を活用して頂ければ幸いです。